

日本文学会の思い出

——共同研究室のことなど——

伴 利 昭

『論究日本文學』第百号までのあゆみについては、『論究日本文學』の八十一号「五十周年記念号」を、それ以降のことはバックナンバーに譲りたいと思う。ここでは思い出を記してみよう。

日本文学会を語るのに共同研究室のことを抜きにはできない。日文共研は、部屋の鍵など日本文学会の委員に管理が一部任せられていた。部屋には水道施設やガスの設備もあって、開架の図書も基本的な辞書を中心に揃っていた。

そんな訳で、昼も夜も調べ物や論考に取り組む学生や教員の姿が途切れたことがない。日頃の勉学も含めて、大学での学習の場が共同研究室を中心に展開し、学友との交流も共研を核とした。

このような姿を大事に守って立命不夜城と自分たちで称して研鑽を重ねた。思い出しても心地よい時である。ただ、何年かに一度は夏休み期間中に部屋と書物を丸ごと燻蒸して消毒することもある。そのあとの研究室は、時間が経つても葉が効いていて、在室して何分かすると涙がポロポロ、泣き泣きの読書となることもあった。今となつてはなつかしい。

毎年、四月に新学期を迎えると、学舎と道をはさんでたたずむ朱山に登るのを常としてきた。低いが形のよい山で、この中腹には平安時代を代表する天皇のひとり、一条天皇の御陵がある。ここからは京都市街が眼下に一望できる。まずは平安京をしのび、紫式部や清少納言に想いを馳せる。日本文学を学ぶ者の学年始めの行事である。

京都に位置する学校として当然のことながら、都の風土と切っても切れない縁深い関係にある。山はすぐ目にとび込んでくる比叡山であり、少し歩けば加茂川の流に出会う。京都に学ぶ学徒としては、比叡山にのぼり、加茂川を尋ねることも行動の第一歩として求められるところだ。

そんな気持ちを持って、四月の学年始めの儀式のようにして比叡山にのぼり、加茂川の源流を尋ね、棧敷岳にのぼり、往事を忍ぶのを例としてきた。

一条帝の御陵は宮内庁の管理下にあつて、美しく参詣道は清められていて、おのづとすがすがしい思いが湧く。双が丘の徒然草遺跡も目の前であり、京都御所も手の届きそうなところにあるように感じる。平安文化の故地と対峙しながら一刻を過ごすのは心おどる体験である。ここからは比叡山が形よく見える。京都御所から比叡山ホテル行きの京阪バスを利用して、時間がある時は無動寺谷の古道を歩いて比叡山を体感するのもよいだろう。

立命館大学日本文学会は、その立地と環境を利用していろいろと展開させてくれるのである。

(ばん・としあき 本会名誉会員)